

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「パレスチナ／イスラエル紛争の変容：最終的地位と新たな課題」（令和4年度第4回研究会）

日時：令和5年2月6日（月曜日）

午後3時～午後7時

場所：本郷サテライト／Zoom によるオンライン同時開催

報告者名・報告タイトル：

細田和江（AA研共同研究員・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

「イスラエルのパレスチナ人作家と翻訳」

浜中新吾（AA研共同研究員・龍谷大学）

「イスラエル社会の分断、政策選好、および民主主義の後退」

細田和江氏（AA研共同研究員・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）は、イスラエルにおけるミズラヒームやパレスチナ・アラブ人の文学活動について報告し、特にアラビア語による執筆の拡大とヘブライ語への翻訳の増加というここ10年の動向を論じた。

近年、ヘブライ文学に代わってイスラエル文学という枠組みが受け入れられることで、イスラエルでアラブ文学の翻訳が流通するようになり、パレスチナ・アラブ人がヘブライ語ではなく母語で執筆した作品が翻訳によって書店に並ぶようになった。アラビア語の作品をヘブライ語に自己翻訳する事例やアラビア語とヘブライ語を組み合わせる創作の試みもあり、これらの動向はイスラエル文化の脱シオニズム化と並行するものとして捉えられる。

質疑応答では文学の動向とイスラエル社会の変化の関係性、読み手の層や社会の需要に関する議論がなされた。

浜中新吾氏（AA研共同研究員・龍谷大学）は、イスラエルにおける近年のエスノナショナルな政治の傾向と民主主義の機能不全について、有権者の政策選好を分析することでその原因を論じた。

同氏は2022年9月14日から10月2日にかけて、ユダヤ人有権者の政策選好を把握するためのコンジョイント実験をウェブ上で行った。その結果、親ネタニヤフ派の有権者は反民主的・民族的な政策選好を持っていることが改めて確認できた。また、イスラエルでは民主主義国家とユダヤ人国家という基本的なヴィジョンをめぐって深刻な二極化が起き

ており、ユダヤ人有権者はユダヤ人国家を目指す方向に傾いていることがデータ上で明らかになった。ただし、本調査の回答者にはアラブ系市民が含まれておらず、実験を用いていない他の実証研究では電話や対面調査によってアラブ系市民にアプローチしている。

質疑応答ではアイデンティティ投票やイスラエル政治の権威主義的な傾向について議論がなされた。

溝川貴己（早稲田大学文学部中東・イスラーム研究コース）

（以上）